

金融にみる利益

銀行の審査能力は？



昨年3月に大学を退職し、38年の勤続に対する退職金をもらった。本人にとっては「虎の子」だから、少しづつ老後の年金生活の生活費補填ほてんに使うことになると考えていた。定期預金にしても昨今の金利ではたかがしれているから、普通預金のままほっておくつもりだった。

ところが、払い込みから数日もたたないうちに個人資産運用の「ご相談」と称して銀行窓口と呼ばれることになった。要点は「このまま普通預金に置いておくのではなく、投融資型の金融商品に資金を回し、多少とも利殖を図る方がお得だ」ということだった。ひと昔、ふた昔前なら、大口預金者は歓迎されたはずだ

が、窓口で話していると、一日も早く預金から乗り換えてほしいということのようで、今日の銀行では預金が邪魔者らしい。大学で教えていたゼミの学生たちに銀行に就職した卒業生がかなりいる。1980年代くらいまで就職後の最初の仕事は「預金集め」だった。預金獲得競争が規模の大きさを競う銀行間で行われた。それほど資金量が重大関心事だったが、今や様変わりしたようだ。

銀行の活動は本来、預金吸収によって成り立っている。自己資本だけを運用するのは高利貸しだと銀行論の初歩的なテキストにも書かれている。その原理が変わるわけはないだろう。だから預金を生命

保険会社などが設定した金融商品へ乗り換えることを勧めるのは、預金が過剰で銀行が資金運用に困っているからだ。過剰な資金を日銀に預けていても、マイナス金利の負担がのしかかるから、一層そうした要請が強いのもかもしれない。ただ、投資アドバイザーという窓口係の立て板に水の説明を聞きながら、何とも奇妙に感じた。そんな有利なら、銀行が自ら運用したらいい、なぜ自分でやらないのだろう。本当は大して有利でもなく、運用リスクがあるので、それをこちらに押し付けようとしているのではないか。

疑いだせばきりがなが、はっきりしていることは、自分で運用してもうけるよりは、顧客を説得できれば、銀行に手数料が入る。その目の前にある手の届く利益に向かって銀行は動いていることである。銀行が資金運用に関わるリ

スクを回避し、確実な手数料に期待していることによって、リスクは預金者に転化される。資金運用の期待収益は将来の予測できない経済変動によって変化する。そのリスクを引き受けて円滑な資金流通を図るのが金融仲介を担う銀行の役割だ。それを回避するのは、銀行の経営能力が劣化したことを意味する。だとすれば、そんな銀行にお金をおいておく必要もないので、手数料を稼がせるのはしゃくに障るが、「お勧めに」従った。

しかし、何かが変だ。確かに景気は必ずしもよくない。投資が冷え込んでいる。しかし銀行に新規事業を育てる審査能力があれば、預金による調達コストはほとんどゼロなのだから運用に困らないはずだろう。それとも日本の銀行の審査能力はフィクションだったのだろうか。

(東大名誉教授 武田 晴人)